水戸（みと）　光圀（みつくに）（水戸黄門）

［第一話］

テレビドラマの「水戸黄門」は、松下電器産業㈱を創業した松下幸之助さんの発案で、昭和四十四年以来続いている有数の長寿番組です。幸之助さんは少年時代、立川（たつかわ）文庫の講談本「水戸黄門漫遊記（まんゆうき）」に大きな影響を受けました。

悪人をこらしめ、弱い者を助けるという、たとえ作り話であっても、水戸黄門の名は、子どもたちの頭のなかに焼きついていきます。さらに多少なりとも興味をもって勉強するならば、偉大なリーダー・政治家・学者・経営者としての実像（じつぞう）を学ぶことになるでしょう。このドラマへの、幸之助さんのねらいや期待は、そこにあったと思われます。世界に知られた経営者松下幸之助さんの、別な一面での意義ある立派な仕事であったといえましょう。

黄門さま――水戸光圀公は、少年のころ手のつけられない不良でした。それ

が十八歳のとき、司馬遷の「史記」という歴史の本を読んでから、すっかり人が変わり、学問と修養につとめます。それだけでなく「史記」に負けない日本の歴史書を作ろうと志を立てたのです。

神武天皇から第百代の後小松天皇までの歴史を編集するのですから、すぐれた学者を集め、厳密な調査研究をおこないます。ドラマの助さん格さんは学者で実在人物。光圀の手足となって、全国に資料を求めかけずりまわった人なのです。ほんとうの黄門さまは、江戸と水戸領内のほかはあまり出かけていませんが、助さん格さんは、光圀の代わりにあちらこちらと旅をしたわけです。

この歴史書は「大日本史」と申します。光圀の生きているうちにはとうていできあがりませんでした。水戸藩の人びとはその遺志を受けつぎ、完成を見たのは実に明治三十九年。一つの書物を作るのに二百六十年の歳月、しかも一つの精神でこれを貫いているというのは、古今東西に例がありません。ひとえに光圀の偉大なリーダーシップによるものであります。

光國の座右の銘というのがあります。

「堪忍は一生の相続」

「正直は一生の宝器」

「慈悲は一生の祈禱」

江戸時代を通じて名君中の名君といわれるこの人は、堪忍・正直・慈悲をみずからの信条として、生涯守り続け、修養を積んだのでした。この三つが座右銘の前文で、このあと具体的に十か条あるうち、二か条を紹介しておきましょう。

一、欲と色と酒を、かたきと知るべし。

不良少年だった黄門さまは、若いとき色や酒で失敗したことが、きっと多かったにちがいありません。経験した者の切実な言葉です。

二、小さき事は分別せよ。大なる事は驚くべからず。

小事・細事ほど慎重に熟慮して行なえ。大事は驚いたりうろたえたりしてはならぬ。落ちついて処理しなさいというのです。

光圀公には三つの顔があります。領民を愛し善政をほどこした名君・多くの著書を残し水戸学派の祖である学者・将軍家の近親でありながら尊皇思想のさきがけとなる、この三つを一人で兼ね備えた不思議な人物でありました。

元禄十三年（一七〇〇）七十二歳没

○　一つの書物を作るのに、二百六十年の歳月とは……。

黄門さまも偉いが、その遺志を受けついだ水戸藩の人々にも大拍手をおくりたい。

○　経営でも助さん格さんになる人物が大切です。

専務、常務の大活躍が立派な会社を作り上げます。

（M生）